

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：33910

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2011

課題番号：22730562

研究課題名（和文）ホームレス支援における効果的なソーシャルサポートの研究

研究課題名（英文）Effective social support to homeless people in Japan

研究代表者

吉住隆弘（YOSHIZUMI TAKAHIRO）

中部大学・人文学部・准教授

研究者番号：60535102

研究成果の概要（和文）：ソーシャルサポートのうち、道具的サポートがホームレスの精神的健康度を増進しており、生活に密着した具体的な支援およびそれが得られるネットワーク構築の重要性が示された。一方、生活保護受給により居宅生活に移行した人にとっては、行政職員との関係性や余暇活動の促進が生活満足度にとって重要であることが示された。

研究成果の概要（英文）：Out of social supports instrumental support enhanced the mental health of homeless people, which suggests the significance of a support closely related with their life and a construction of the support network. While, for the welfare recipients who was former the homeless, an empathetic attitude of social case worker and a promotion of leisure activities is important in promoting their well-being.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
総計	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：ホームレス、生活保護、ソーシャルサポート、精神的健康度

1. 研究開始当初の背景

ホームレスとは、「都市公園、河川、道路、駅舎その他の施設を故なく起居の場所とし、日常生活を営んでいる者」と定義される。1990 年代後半、いわゆるバブル崩壊以降、それまで一般の方の目に触れることのなかったホームレスが、公園や図書館等の公共の施設でも目にされるようになり、社会問題の一つとして認識されるようになった。

ホームレスの問題に対する施策としては、就職斡旋など自立支援を目的とした「就労自立アプローチ」、生活保護の適用による「福祉的アプローチ」、退去指導など社会適応を目的とした「退去アプローチ」の 3 つがあるが、最も重視されてきたのは、当事者の就労自立を目指すアプローチである。しかし、就

労支援を受けた者のうち、最終的に就労にまで至るのは 25%程度という報告や、いったん就労しても再び野宿化してしまう問題が指摘されており、従来までの支援施策の効果への疑問が呈されている。

上記の問題の背景にある要因としては、当事者の精神疾患をはじめとする心理的問題や、コミュニティからの孤立といった社会的ネットワーク上の問題が、近年指摘されるようになった。前者に関しては、近年、ホームレスの精神疾患の割合が調査されるようになり、後者に関しては、他者とのつながりを意識した支援も行われるようになってきた。しかし、わが国での研究知見は少なく、とりわけ心理学的なアプローチを用いた研究は皆無といえる。

2. 研究の目的

そこで本研究では、わが国では未だ少ないホームレスを対象とした調査を実施することとし、とくにその支援のあり方を、心理学的な観点から検討することを目的とした。具体的には、以下の3点について検討することとした。

(1) ホームレスの実態調査

ホームレスの総数については、厚生労働省による目視調査が全国で行われているが、実際にどのような背景を持った方達かは明らかにされていない。そこで、ホームレス支援を行うNPOが実施している生活医療相談に参加し、その実数および2年間での変化を調査した。加えて、生活医療相談の内容を元に当事者の特性を明らかにすることを目的とした。

(2) ホームレスの精神的健康度およびソーシャルサポートとの関連

ホームレスの精神的問題は、自立の阻害要因の一つと考えられているが、わが国での調査数は少ない。そこで当事者の精神的健康度に関する調査を実施し、その程度を検討することとした。また、支援の際の手がかりとするために、精神的健康度と関連する心理社会的要因についても調査した。とりわけ家族、友人、NPO等支援者、行政職員からの受けるソーシャルサポートとの関連を検討した。

(3) 元ホームレスの生活保護受給者の生活満足度と関連する心理社会的要因の検討

ホームレスの方への福祉的支援としてあげられるのが、生活保護の受給制度であるが、受給自体が最終的なゴールではない。経済上の自立のみでなく、身体や精神面の健康や生活管理といった日常生活上の自立や、地域社会の一員として充実した生活を送るといった社会生活上の自立も考慮することが必要である。そして、そのためには居宅生活に移行後もアフターフォローを行いながら、当事者の状態をケアしていくことが必要とされている。そこでホームレス経験があり現在は生活保護を受給している方を対象とし、当事者の生活状況を調査することとした。加えてwell-beingの一側面である、生活満足度を心理的指標とし、それと関連する心理社会的要因を検討した。

3. 研究の方法

(1) ホームレス実態調査

ホームレス支援を行うNPO団体の生活医療相談にボランティアスタッフとして参加した。そして、自発的に相談に来られた相談者を中心に、相談内容とともに、これまでの生活歴の聞き取りを行った。活動回数は2010年度は51回、2011年度は49回であった。

(2) ホームレスの精神的健康度およびソーシャルサポートとの関連

NPO団体の支援活動に参加し、同意を得ら

れた方に、アンケート調査を実施した。質問項目は、精神的健康度調査としてGeneral Health Questionnaire (GHQ)、知覚された道具的サポートおよび情緒的サポート、およびデモグラフィックデータ(年齢、路上生活期間、仕事の有無)であった。男性30名(平均年齢56.1歳)から調査協力の同意が得られ、分析を行った。

(3) 元ホームレスの生活保護受給者の生活満足度と関連する心理社会的要因の検討

NPO団体に支援履歴がある方で、調査協力の同意が得られ、かつ現在生活保護を受給している106名(男性98名、女性8名、平均年齢57.8歳)を分析対象とした。デモグラフィックデータ(性別・年齢・居宅生活年数・仕事の有無等)、生活必需品(社会生活や住環境に関する必需品)、社会的ネットワーク(ケースワーカーとの関係や知覚されたソーシャルサポートの程度)、心理的要因(ストレスや孤独感等)に関する構造化面接を行った。

4. 研究成果

(1) ホームレス実態調査

2010年度の相談者は延べ421人(7.5人/回)、平均年齢は58.8歳であり、2011年度の相談者数は延べ320人(6.5人/回)、平均年齢は57.2歳だった。図1に月ごとの相談者の変化の様子を示した。2年間の変化としては、相談者全体の数としては減少したが、比較的若い20-30代の相談者が二年間で増加しているのが特徴として示された。年齢の若いホームレスの特徴としては、路上での生活期間が短く、生活手段に困っている方が多かった。加えて、親子関係に問題のある方や、知的な遅れがある方も見られた。相談者の生育歴、ハンディキャップの程度、そして現在の状況を配慮した支援策を必要としていることが示された。

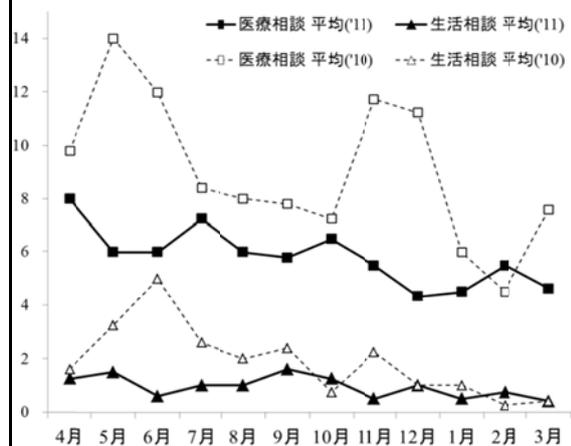


図1 2010-2011年度生活医療相談数

(2) ホームレスの精神的健康度およびソーシャルサポートとの関連

临床上注意を有するとされる、GHQ カット

オフ得点以上だった当事者の割合は、76.7%と算出された。路上生活の過酷さは、身体的健康のみならず、精神的健康をも阻害し易いことが示された。また単相関分析を用いて、精神的健康とソーシャルサポートの関連を検討した(表1)。その結果、サポート全体得点の高い人は精神的健康度が高かった。またサポートの種別に関しては、情緒的サポートが精神的健康度と関連しなかったのに対し、道具的サポートは中程度の関連を示した。路上生活という過酷な状況で生き残るためには、生活に密着した具体的な支援が得られるネットワークを築けているかどうか、当事者の精神的健康を保持する上で重要であることが示された。

表1 精神的健康度との関連

	GHQ得点
個人の属性	
年齢	-.20
路上生活期間	-.23
生活形態	.10
仕事の有無	.05
デイケアサービスの利用	-.37 *
日常生活の困難事項	
食事	.30
金銭	.01
仕事	.21
人間関係	.14
体調	.56 **
寂しさ	.22
退屈	-.13
気分転換	.09
ソーシャルサポート	
サポート全体	-.45 *
道具的サポート	-.56 **
情緒的サポート	-.30
家族からのサポート	-.15
友人からのサポート	-.35
支援者からのサポート	-.26
行政からのサポート	-.15

* $p<.05$, ** $p<.01$

(3) 元ホームレスの生活保護受給者の生活満足度と関する心理社会的要因の検討

生活必需品に関する変数、社会的ネットワークに関する変数、心理的要因に関する変数が、調査対象者の生活満足度に与える影響性について検討した。重回帰分析の結果、定職を持っている人、ケースワーカーの対応を良いと感じている人、そして余暇活動を積極的に行っている人は、生活満足度が高いことが示された(表2)。生活保護受給者のウェルビーイングの増進において、従来からの就業支援に加え、余暇活動の推進やケースワーカー

の対人援助スキルが重要な役割を担っていることが示された。

表2 生活満足度との関連

変数	β
年齢	-.02
性別	.15
居宅生活年数	.13
世帯人数	-.01
ホームレス生活の経験	-.16
雇用状態	.26 **
収入	.07
設備	.01
社会生活	.08
保障	-.04
住環境	.01
CWの訪問頻度	.07
CWの対応	.37 **
ソーシャルサポート	.06
日常のストレス	-.12
孤独感	.00
退屈	.01
余暇活動	.22 *

* $p<.05$, ** $p<.01$

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 吉住隆弘・山田壮志郎 生活保護受給者の生活満足度と関連する心理社会的要因の検討 人文学部研究論集 査読なし(印刷中) 2012年.

[学会発表] (計5件)

- ① 吉住隆弘 N市で生活するホームレスの方を対象とした民間支援団体による生活医療相談の現状と課題 平成23年度愛知県公衆衛生研究会 2012年1月 あいち健康プラザ
- ② 吉住隆弘 生活保護受給者のウェルビーイングに関する研究—心理社会的要因の検討— 第30回日本心理臨床学会 2011年9月 九州大学
- ③ Yoshizumi, T. Subjective life satisfaction of people receiving public assistance in Japan. The International Society for the Study of Individual Differences. Jul., 2011, London, UK.
- ④ 吉住隆弘 路上生活者への援助とその課題(2) 第29回日本心理臨床学会 2010年9月 東北大学
- ⑤ Yoshizumi, T. Homeless people in Japan: the psychological characteristics and the need for psychological support. 27th

International Congress of Applied
Psychology, Jul. 2010, Melbourne,
Australia.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉住隆弘 (YOSHIZUMI TAKAHIRO)

中部大学・人文学部・准教授

研究者番号：60535102

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号：